

今月は、形成外科で行っている下肢静脈瘤治療について、ご紹介させていただきます。
対象となる患者さまがおられましたら是非ご紹介をお願いいたします。

下肢静脈瘤治療について



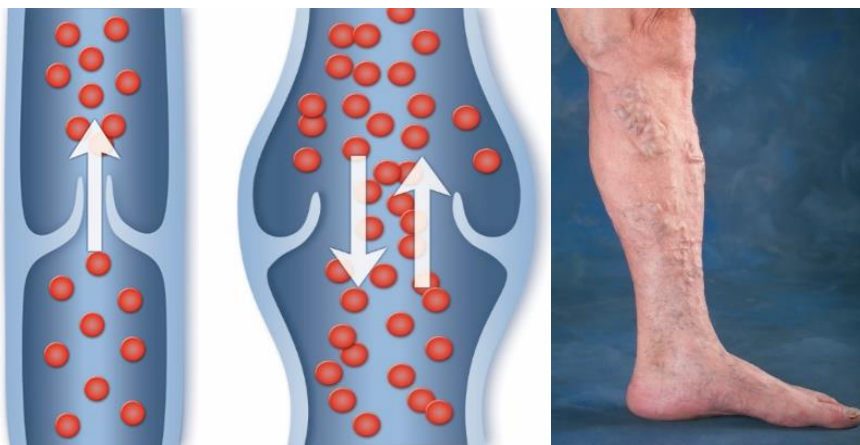
形成外科 部長
藤田 和敏

- ・当院では、下肢静脈瘤に対する治療を積極的に施行しています。
- ・下肢静脈瘤に対する血管内焼灼術の中で、2019年12月から保険適応となった血管内接着剤治療（血管内塞栓術）の実施施設となっております。
- ・従来より行われていた血管除去術（ストリッピング手術）をはじめ、上記のような低侵襲の手術方法を患者さまの病態に応じて選択して手術を施行しております。
- ・現在は入院手術を基本としておりますが、今後は状況に応じて、日帰り手術も選択できるように体制を整えております。
- ・下肢静脈瘤を疑う症状や、血管内治療を中心に説明させていただきます。

静脈と下肢静脈瘤について

静脈弁は、立っている時に血液が足の方に戻ってしまうのを防いでいます。この弁が壊れると、血液が逆流してその下にある静脈に血液がたまってしまいます。

血液がたまった状態が毎日毎日、何年も続くと徐々に静脈の壁がひき延ばされて太くなります。さらに太くなると静脈はヘビのようにグネグネと曲がりくねった状態になります。この「静脈が曲がりくねった状態」が「下肢静脈瘤」です。



下肢静脈瘤の症状

- 足の血管が浮き出て見える
- ふくらはぎがだるい・重苦感
- 足のむくみ
- 足のごむら返り（つり）
- 足がほてる・熱く感じる
- 足のむずむず感・不快感
- 足のかゆみ・湿疹
- 足の色素沈着
- 足の潰瘍

下肢静脈瘤の悪化について

下肢静脈瘤は命にかかわる病気ではありませんが、放置しておいて自然に改善することはなく、時間の経過とともに徐々に悪化していきます。

重症化すると湿疹や脂肪皮膚硬化症などの「うっ滞性皮膚炎」を合併し、さらに悪化すると「潰瘍」になってしまいます。

下肢静脈瘤の悪化



静脈瘤



腫脹



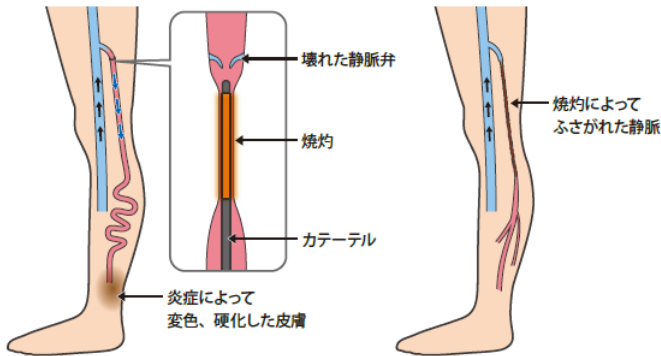
皮膚変色



皮膚潰瘍

下肢静脈瘤血管内治療（血管内焼灼術）

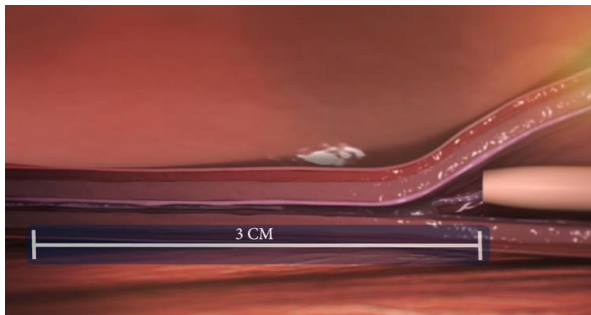
血管内治療は、静脈を焼灼する治療です。カテーテルを弁不全に陥った静脈に挿入し、内部から熱を加えて焼灼します。焼いた静脈は固く縮み、治療後半年ぐらいで吸収されます。



このカテーテルを血管内に挿入し、中から焼灼します。

最新治療！！ 血管を接着剤でふさぐ「血管内塞栓術」

2019年12月から保険収載となった下肢静脈瘤の最新治療が血管を接着剤でふさぐ「血管内塞栓術」です。従来の血管内焼灼術は、熱を発するので、火傷防止に麻酔液を血管外に注入しますが、血管内塞栓術は熱を発しないので、その手技も不要となりました。また、熱による神経の損傷のリスクもないため、より低侵襲な治療法です。



このカテーテルを血管内に挿入し、左図のように接着剤（グルー）を注入して血管を閉塞させます。

その他の治療法

“硬化療法”

硬化療法は、下肢静脈瘤に薬を注射して固める治療です。固めた血管が硬くなることから硬化療法と呼ばれています。硬くなった静脈は、半年程度で吸収されます。外来で施行可能な手技ですが、軽症の下肢静脈瘤が適応になります。進行した症例に対しては、血管抜去や血管内治療でないと効果が期待できない場合があります。また、薬剤によるアレルギーや色素沈着が起こることがあります。

“保存的加療”

運動・マッサージなどによる生活習慣の改善はもちろんですが、弾性ストッキングの着用がメインになります。ふくらはぎのポンプ作用を助けることによって静脈還流を促し、下肢静脈の血流うっ滞を防ぎます。正しく着用すれば、下肢静脈瘤の症状緩和に役立ちます。手術を希望されない方にお勧めしております。

下肢静脈瘤の症状に合致する方、下肢静脈瘤を指摘され症状を認めているが手術を悩んでいる方、下肢静脈瘤なのかどうか気になっておられる方などがおられましたら、是非ご紹介いただければと思います。



当院は地域医療の拠点病院として、今後も地域医療に貢献していく所存です。何卒宜しくお願いいたします。